

## 新美南吉作品の悲劇性 前編

鈴 木 松 三

**要 旨** 「…雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお日様がキラキラと照らしていたので、雪は眩しいほどに反射していたのです。」南吉はこのような日本の原風景の中で、民話的なメルヘンの世界を描いている。そして、その風景の中で重荷を背負いながら歩んで行くという悲劇性を織り込んで展開させていく。ではいったい、その悲劇性であるモチーフはどこにあったのか、そのことを作品・日記から探ってみることにする。今回はその前編として、作品「帰郷」までを対象にすることとする。

### 1 家庭環境と人格形成

#### (1) 幼児体験

1913年（大正2年）～1926年（昭和元年）

- ・ 4歳 実母 りえ 死亡
  - ・ 7歳 半田第二小学校へ入学（岩滑小学校）
  - ・ 8歳 実母 りえ の継母 志も の養子となる
- 一学期ほど養家から通学したが、実家へ帰る。

・ この年 7月父、継母協議離婚 12月復縁  
4歳で母死亡、6歳で弟 益吉 が生まれる。8歳の7月9日、父協議離婚し12月3日には復縁。

この間、7月28日、養子となり、一学期ほど養家から、通学している。正八にとって、まさに事態の急変である。母の死による心の傷も癒えぬ中、受け入れるだけの理解力もなく、正八はまだ、自分を語るだけの力も持ち合わせていない。

したがって、この間の正八の思いは、22歳のときに書いた「小さな魂」からしか覗き見ることができない。

「小さな魂」は、おばあさんと孤独な少年 伸 が登場している。おばあさんは実母の継母であり、伸は自身であろうと想定される。伸は半月ほど前、住み慣れた環境から、何も分らずに引っこ抜かれ、連れてこられた少年である。まるで違った環境である。その生活に溶け込めずに戸惑っている。上手くなじめない。ほんの僅かしか養家にいなかった事情は、おばあさんの描写から読み取ることができる。

「おばあさんというのは、夫に死に別れ、息子に死に別れ、嫁に出て行かれ、そして、たった一人ぼっちで、長い間を、その寂寞の中で生きてきたためだろうか。私がそばへ寄っても、私のひ弱な子供心を、あたためてくれる柔らかい、ぬくもりを持っていなかった。

なにかによって、自分を救おうとし、さまざまな努力をこころみた。死んだ叔父さんが、若いときに読んだという、多くの書物の中の絵という絵を彩ってみたり、すくってきたフナをバケツに入れて飼ったり、竹馬を作ったり、紙でつぼうをとばしたり。しかし、それらはみな、こころの空虚（うつろ）を満たしてはくれなかった。」

おばあさんが正八にしてやったことは、精一杯優しくし、何とかなつかせようと努力した。彼女にしてみれば最善の策であったであろう。しかし、孤独な生活を続けてきたおばあさんにとっては、両親の温かみをそこに求めていたナイーブな精神の持ち主、伸の心を暖かく包むことはできなかった。

さらに、彼の孤独な姿を次のように描写している。

「…日暮れになると、わたしはもうどうしたらよいか分らなかった。ヒイラギの木の下や、軒端につまれた藁の上にちょこんとして、やり場のない寂しさを、藁のすべすべをかみかみ、こらえていた。」

「小さな魂」の伸は、おばあさんとのあいだで癒

されない心の孤独だけでなく、周りのこどもたちとの間でも、溶け合うことができないやり場のない寂しさの中にいた。

この作品は22歳の南吉によって書かれたから、伸の内面を深く表現できた。しかし、8歳の伸は孤独の深淵にまでは想いが至らなかったと思われる。したがって、一人取り残されて悶々として、孤独の闇をさ迷い歩いていたことであろう。

こうした幼児体験が彼の人格形成に大きく影響したものと思われる。

## (2) 南吉の自己の作品認識

1926年7月の日記に、次のように書いている。

私はKにこういわれたことがある。…君の文章はなかなか面白いところがある。しかし、君はいつも同じような文を書く癖があるね。その癖は悲戯だよと。

なるほどと思った。それからなるべく愉快な明るい気分を有する文章を書いていた。しかし、私はこんなことを考えるようになった。

癖にも悪いのと良いのとがある。Kはわたしにあんなふうに告げただけでも、先生には度々誉められたのだから、私の癖は悪いのではない。あの悲しみを持った文が、私の前世からの付物だったのかもしれない。だから私は、それを棄捨するに及ぶまい、てなことを。だから、今度は昔にかえて、自分の癖をぶちまけて赤裸々に書く。

孤独と悲しみと憂いを込めて書いた文章こそ天が私に与えてくれた個性なのだとまで言い切っている。彼はこの時から、悲しみと孤独に満ちた自らの幼児体験を受け入れて、文章を書いていくんだという自分が歩むであろう将来の道筋を漠然と描いたのではないと思われる。ゆうならば南吉が児童文学作家として南吉らしさを形成した原点がここにあったといえる。

## 2 初期作品における悲劇性

### (1) 少年の頃の作品

#### 「赤蜻蛉」15歳の作品

…赤蜻蛉はやがて、お嬢ちゃんの肩を離れて、垣根の先に移動しました。「あたしの赤蜻蛉よ、さようなら……」

可愛いお嬢さんは、何遍もふりかえりました。けど、ついにみんなの姿は見えなくなってしまったのです。もうこの家は空き家になるのかなあ。赤蜻蛉は微かに首をかたげました。

淋しい秋の夕方など、赤蜻蛉は尾花の穂先にとまって、あの可愛いお嬢ちゃんを思い出しています。

#### 「銭坊」15歳の作品

冷たい街路を風に吹きまくられて、酔どれのようによろめいてくる瘠せ細った犬、確かにそれは銭坊でした。めっかちだった銭坊でした。

「銭坊！」坦吉は窓を開けて叫びました。銭坊は立ち止まりました。そして振り返りました。けれども、銭坊は坦吉の姿を見ることは能ないのでした。両方とも目が潰されていたから。……

長い長い尾を頻りに振りました。「銭坊、待ってろ！」坦吉は階段を転げるように下りて、外にでました。

しかし、坦吉が外にでた時には、風のようにめくらの犬は消えていました。坦吉は口笛を鳴らしながら、隅なくあたりを探し回ったのです。が、……遂に銭坊は見つかりませんでした。

銭坊はどこをさまよっているのでしょうか。

#### 「巨男の話」1929年7月 16歳の作品

…巨男は自分が死んだら、白鳥が涙を流すだろうと考えました。巨男は高い高い塔の上から身を投げました。白鳥は始めて涙を流しました。すると、白鳥の姿はお姫様になりました。

でも、白鳥はどんなに嘆いたことでしょう。

「私はいつまでも白鳥でいて、巨男の背中にとまっていたかった。……」

空が曇っていて、金星が一つうるんで見える夜更けなど、南国の人々は、今でもあれは巨男の灯だと空を仰いで申します。

#### 「のら犬」1929年10月 16歳

かわいそうに、犬ならのら犬だ。食い物もろくに食わんと見えて、ひどくやせていた。はるばる隣村から私についてきたんだから、あったかくしてとめてやろう。それに、私の落としただんごまで、ちゃんとくわえてきてくれたんだもの。おれが悪いよと、これだけは心の中で言って、常念坊はちょうちんを持って出て行きました。

## 「中秋の空」1929年9月 昭和4 16歳

夕方である。詩を好んでいたYが、一週間ほど前に、逝ったということを聞いた。僕は床について、前の雨戸を開けて、星雲の一隅にじっとして動かない小さな星をYの澄んだ瞳と思ってやった。冥福のために。××××

遠い彼方の空を眺めながら、とぼとぼと歩いた芭蕉が何処かで見受けられそうな野原や田畑になった。ポプラの高い寄宿舎の空は本当に広く、本当に青く本当に侘しいな。

明日もきっと澄み渡った空だろう。

## 巽聖歌「南吉と私」より

しかし、彼はおとなしい少年に似合わない鬼っ子だった。中学3年の日記に、次の様に書いている。

余の作品は、余の天性、性質と、大きな理想を含んでいる。だから、これから多くの歴史が展開されていって、今から何百年、何千年後でも、もし余の作品が認められるなら、余はそこに再び生きることが出来る。この点において、余はじつに幸福といえる。

3月2日 中学校3年 15歳

さらに、豊橋中学校の交友詩を読み、それを批評して、次のように日記に書いている。

豊中交友紙を繰ってみる。三年生の書いたのに、非常に好いがある。余など足元にも寄り付けない。余は感心すると同時に、嘆息した。

しかし、よくよく考えてみると、何も羨む必要はない。作文においては、余より優れているが、児童文学においては、おそらく余が優れているだろうから。人間は、たった一つのことに長ずれば可也。

(これらを読んで巽聖歌は) 何を、田舎者。この生意気な小僧ッ子がと、思わず言いたくなる。鼻っばしの強い自信たっぷりだ。愛知県半田の一中学生のこの嬌慢にも似た南吉の自信はどこからかと、驚いて「南吉と私」の中に書いている。

この年の彼は「張紅林」「サーカス(正坊とクロ)」を書いている。児童文学という言葉だって、当時専門家以外に使われたかどうか、これは怪しい。それ

ほど彼は児童文学に熱を入れていたといえる。

また、昭和4年5月20日、学年は一年進級したが、同じ年の日記に、次のように書いている。

母はおれが、写筆をしていると、むやみに怒る。彼女は陰険だ。父は、母につれて怒る。彼はたりない。俺は一度も芽を出さずに亡びる男だろうか。そんなばかな。そんなばかなことはないはずだ!

豊橋中学校の交友紙を読んで書いた自信たっぷりの態度、父母に対する弱気の悲鳴、疾風怒濤の青春の真っ只中における豊かな才能を持った彼の叫びであった。

ままははとあらがいわめき家をでぬ

我が顔を見る人の目まぶし

(昭和5年9月22日半田中学卒業の年)

## (2) 悲しみに満ちた別れ

それでは少年の頃に書いた作品の別れの中身を見つめて見よう。

### 「赤蜻蛉」一寂しい別れ一

もうこの家は空き家になるのかなあ。……寂しい秋の夕方、赤蜻蛉は尾花の穂先にとまって、あの可愛いお嬢ちゃんを思い出しています。

### 「銭坊」一無常の別れ一

長い尾をしきりに振りまわした。「銭坊待ってる!」

坦吉は階段を転げるように…しかし、外に出たときには、風のようにめくらの犬は消えていました。坦吉は口笛を鳴らしながら、隅なくあたりを探し回ったのです。が、——ついに銭坊は見つかりませんでした。

銭坊はどこをさまよっているのでしょうか。

### 「巨男」一悲恋の別れ一

白鳥ははじめて涙を流しました。すると、白鳥の姿はお姫様になりました。

でも、白鳥はどんなに嘆いたことでしょう。

「私はいつまでも白鳥でいて、巨男の背中にとまっていたかった。……」

空が曇っていて、金星が一つうるんでみえる夜更けなど、南国の人々は今でもあれは巨男の星だとそれを仰いでいます。

### 「張紅林」一思いやりの別れ一

「一私はあなたとお話がしたい。けれどお話し

たら支那人の私にあなたが古井戸から救われたことが分ると、あなたの名前に関わるでしょう。だから、私はあなたに嘘をつきました。私は明日、支那へ帰ることにしていたところです。さようなら。おだいじに、さようなら」と、だいたいそういう意味のことが書いてありました。

#### 「正坊とクロ」―運命の別れ―

―正坊はニコニコしながら…ビスケットをつかみだし、クロのお口の中へいれてやり、何度も何度も鼻の上をなでてやりました。

正坊の後ろには、お千代が涙ぐんだ目をしていました。二人ははじめて定休日に、クロをみにきたのでした。

#### 「のら犬」―心痛の別れ―

かわいそうに。食べ物もろくに食わんと見えて、ひどくやせていた。はるばる隣村から……それに、わしのおとしただんごまでちゃんとくわえてきてくれたんだもの。おれが悪いよ。これだけは心の中で言ってお念坊は提灯を持って出て行きました。

#### 「ごんぎつね」―満たされた別れ―

「ごんお前だったのかいつも栗をくれたのは。」ごんはぐったりと目をつぶったまうなずきました。

兵十は火縄銃をぱたりと落としました。青いけむりがまだ、つつ口から細く出ていました。

＊ この作品は、1932年（昭和7年）「赤い鳥」に投稿、入選作品として1月号に掲載。最初は、代用教員として2年生を担任しているとき、担任学級や他学年の児童に、「ごん狐」を語って聞かせている。当時児童だった榊原二象は、大日本図書童話集「付録」NO3で、雨の日の体育の時間、教室でごんぎつねの話聞いたとの思い出を記している。

この頃の作品は、起承転結の結の部分で共通して、自分の意思に反して別れなければならない状況が設定されている。昭和3年に書いた日記「あの悲しみを持った文章が、私の前世からの付物だったのかもしれない。…だから、自分の癖をぶちまけて、赤裸々に書く。」と書いたあの時の思いと、同じ直線上にある作品である。

さて、ここでこの悲しみのもつ意味について吟味をしてみる。

#### 「赤蜻蛉」…

「あの可愛いお嬢ちゃんを思い出しています。」

―寂しい別れの向こうにお互いの姿が浮かんでくる。穏やかな中で寂しさを持った別れ―

#### 「銭坊」…

「銭坊はどこをさまよっているのでしょうか。」

―過酷な運命を背負って生きる相手との別れ、捨てきれないで心の奥に留めおく優しさの別れ―

#### 「巨男」…

「白鳥でいて、巨男の背中に止まっていたかった。」

―自分を犠牲にして相手を救ったが、どうして犠牲までしてと、相手は嘆く。悲恋の別れ―

#### 「張紅林」…

「あなたのお名前に関わることでしょう。だから嘘をつきました。…さようなら。おだいじに。」

―相手の立場を考え、自ら姿を消して行く。壁を乗り越えられない辛さの別れ―

#### 「正坊とクロ」…

「初めての定休日にクロを見にきたのでした。」

―別れた相手との再会、僅かな時間の喜び、その後にくる涙の別れ。

#### 「のら犬」…

「おれが悪いよ。それだけを心の中でいって、常念坊は提灯をもって、出て行きました。」

―こんなことまでしてくれたのに、姿形だけで、判断して追い返した。懺悔で心痛な別れ―

#### 「ごんぎつね」…

「ごん、お前だったのか、いつもくりやまつたけをくれたのは。ごんはぐったりと目をつむったまうなずきました。」

―分り合えぬ非情さ、やっと分かり合えたその時、今生の別れ、無情な中でも満ち足りた別れ―

ここで紹介した作品が、少年（15歳・16歳・17歳）の頃書いたものである。そのどれもが、別れという悲劇的要素をもって構成している。それは形の上では悲劇的であるが、読み終えたあとの余韻の中で、不思議と様々な暖かな人間模様が描き出されてくる。

それは、確かに物理的には、再び会うことが出来ないという別れである。しかし、そのどれもが、たとえ身は別れても、心はしっかりと結びついていて、悲しさの中にも暖かさがあるからである。

まだ幼い4歳のとき、母との別れに際して、本当の悲しさは、理解できていなかったであろう。時がたつにつれて、二度と会えないことが次第に理解されていく。そして、ついには、ぽっかりと空いた深い悲しみの淵に沈みこんでいった。孤独という環境

の中で、ますますその悲しみは、深く、大きくなっていったらう。彼にとって別れとは、言いようのない悲しみであり、別れた相手を思うことで、冷え切った心を暖かく包み癒してくれるものであったに違いない。

別れても、なお、いとおしく思い続ける母への思い、このことが作品に色濃く反映しているのではないか。

### 3 病との対座

優しい母の愛が得られず、継母に育てられた正八は、冷ややかな空気を感じながらの暮しだった。この幼児体験が、彼の作品に大きく影響したことはすでに述べた。もう一つ大切なことは、病弱な母親の子として生まれ、彼もまた、身体虚弱で生涯「病」と向かい合っていかななくてはならない運命にあったことである。このことが、人格形成・作品にどのような反映していったのか。そのことについて述べてみたい。

#### (1) 身体虚弱の為受験に失敗

岡崎師範学校を受験したが、身体検査で不合格となり、4月より、母校半田第二小学校の代用教員として勤めることになる。

4月25日、中学校時代の友人、久米常民に宛て、次のような手紙を出している。少々長文だが、受験に失敗したことに対する複雑な心境を知る手掛りになるので載せることにする。

1931年4月25日 封書 久米常民氏宛

久米くん、君のお手紙大変感謝する。ああ僕は今泣いてみたいと思っている。そして、それは嬉しさだよ。君は長い間、手紙をくれなかったんだ。僕は今恨んでいる。本当に。君は僕の方から先に手紙を出せないということ、僕がそういう負けず嫌いの人間であるということを知っていて、何故手紙をくれなかったんだ。

僕はまだ、君の手紙に嘘を書いている。偽善的な嘘を書いている。中学校にいて、交わっていたとき、気持ちの上で、君と僕は勝とう勝とうとして、闘争していた。(このことは今、初めて君に告げる。君の心を覗いてみたまえ。) それなのに、君は僕に勝ったじゃないか。君は喜んだはずだ。僕の失敗と君の成功を。君の手紙には、いたずらに、僕に同情したことばかりが書いてある。僕は

癪にさわってしょうがない。君は僕をそんなに馬鹿な男と思っていてくれるのか。

新聞で君が八高へ入学したことを読んだとき、僕は君にお祝いの手紙をあげた。君はあの手紙をどうしてくれた。破って捨ててくれたか? そうだろう。けれど、生まれてあんな手紙を書いたのは初めてだった。あんなに涙にぬれて書いたのは初めてだった。あんなに重い手紙を書いたのは初めてだった。あんなに。…あんなに。…やめとく。

今きた君の手紙を見ながら、僕の思っていることを述べる。あいつは虚栄心が交わってこんな手紙を書いたんだろう。即ち「俺は八高生だ」を見せびらかす気持ちが入って……本当は僕に手紙をくれるのは厭なんだが、世間一般に友情のない平凡な男のように思われる。それがいやなんだ。俺は友情の男だということを君以外の者(僕一人に限って)に示して、自分を満足させるために書いたんだろう。…

「君の幸福を祈りつつ」ああ、一ヶ月前の手紙に人の幸福なんか祈らなかったはずだ。僕の幸福を祈りつつ、であったのだ。しかし、思えば話のできる奴は君一人だったな。そして、君と僕はそんな話以外に何か結び付くものがあつた。

僕は涙もろくなっている。泣くぞ。君を恨んで泣くぞ。…泣くぞ。

その辺にごろごろしている友達に、代用教員はどうだ? と聞かれると、俺は即座に「のんきなもんさ。子供相手だから」と答えるんだ。しかし、君にはそう答えない。「のんき」な雲の外に浮いているような一言で片付くものか。沢山言いたいことがあるが後に譲る。「幸福か、幸福でないか」と、君は聞くが俺はそんな問には答えない。第一僕は何が幸福で、何が不幸だか知らないから。「幸福や、不幸」という語はやはり、のんきと同じように(少なくとも僕にとっては)雲の外に浮かんでやがるんだ。

日曜日と土曜日は来ても、いないから駄目だが、日曜日の夜とその他の夜はいるから、いつでも来い。来たら覚えてたのドイツ語を語れ。俺は思い切って叩きのめされて泣いて見せるから。

言いたいことが沢山ある。(この手紙は失わないでおいてくれ)

正八

南吉が岡崎師範学校に合格することを強く願っていたという証拠は見つかっていない。彼が芸術家(作家か画家)を望んでいたことは、「蛍色の灯」

「小さな薔薇の花」などの作品から窺い知ることができる。岡崎師範を進学先に選んだのは、家庭の事情で奨学資金の貸与で学費の負担が最も少ないということからであろう。

そう考えると、師範学校が不合格ということは、彼にとって、たいしたショックを受けたとは考えられない。それなのに、何故久米氏に嫉妬に燃え盛るような激しい書簡を送ったのか。

4月25日に封書を出している。久米氏が合格だと新聞で知ったのは、大よそ1ヶ月くらい前のことだろう。自分は受験に失敗した。しかし、ライバルとして張り合ってきた彼が合格した。このときはかなり複雑な心境であったであろう。でも、世間一般の常識に従って、お祝いの手紙を出した。その文面に「君の幸福を祈りつつ…」と書いた。形式的にはそうしたが、心にもないことを書いてしまった。ナイーヴな彼の心は千千として乱れたまま、彼からの手紙による反応をまった。南吉は恐らくすぐに返事が来るだろうと予測していた。

4月7日の日記には、「上級学校に進学した松井栄一・久米常民を思い寂しさをかみしめる」と書いている。しかし、彼の予想を裏切り、届いたのは1ヵ月後のことである。この1ヶ月はかれにとっては長いものであっただろう。彼の封書には「長い間待った」としてあることが何よりの証左である。

## (2) 失敗を活力として

久米氏より手紙が届く。その内容は不明だが、南吉が出した手紙の内容からおおよその見当はつく。「俺は八高生だと見せびらかす気持ちが入って…」は、何を意味するか。久米氏が手紙に返事を出すのが遅れたのは、自分は合格して、南吉が不合格だったのでかける言葉を失っていたからだろうと思われる。南吉から見ると、「久米は合格した勝者、自分は敗者」でしかなく、勝気な彼にとれば、同情されることほど、屈辱なことはなかつただろう。「自分を満足させる為に書いたんだろう。」と、辛らつな言葉を浴びせかけている。

「今はしがたない田舎の代用教員でしかないが、これらの同級生と同じに考えてもらっては困る。遊びに來い。ドイツ語で俺を叩きのめしてみろ。叩きのめされて泣いてやる。」と、久米氏に対して挑戦状をたたきつけた。

芸術家（作家）への夢と、この負けてたまるかのエネルギーもあって、「赤い鳥」への投稿となり、鈴木三重吉に推奨されて、5月・6月、8月「正坊

とクロ」・9月・10月・11月号「張紅林」に掲載されている。さらに、白秋門下による童謡雑誌「チチノキ」に加入、投稿し、11月・12月号に掲載されている。

結果、白秋・三重吉とともに活躍している巽聖歌という彼にとっては、兄とも父とも慕うことになる協力者の知遇を得ることになる。12月には彼を頼って上京している。この間の事情は「小さな薔薇」の中で、かなり詳しく述べている。

中学に入った頃から、作文に才をみせ始め、「月夜」や「小鳥」「笛」というような、浪漫的な美しいもののことを取り扱うとき、時には教師を驚かすような文章を書いた。東京に出て童話作家になろうという決意はこの頃から彼の心に根を下ろした。……

中学校を終えたとき、彼は両親に東京の学校にやってくれと頼んだ。両親は長い間相談した末、「弟を中学に入れるのを止めて、彼の望をききとどけてやる」という結論を出し、許可してくれた。

「小さな薔薇」に描かれているこの部分、虚構もあるだろうが、弟の益吉を小僧に出していることは事実だし、義母にとっては実子を小僧に出すことになるこの相談は、簡単には承服できなかったことと思われる。「長い間相談した末」は、この間の事情を物語っている。

両親からの許可が下りたとき、喜びの気持ちを巽聖歌に書いている。12月に巽聖歌を頼って上京した。この上京によって、依田準一、大木惇夫等を知ることになる。

## (3) 咸子との出会い

職のないまま、ひたすら文学に専念するということはできなかった。収入を得るために、半田第二小学校の代用教員として勤める。ここで、中学のとき以来、ヴィーナスと呼んで、ひそかに思いを寄せていた咸子の弟の担任となる。以後、弟を通してそれとなく付き合いが始まる。同年8月31日に退職願を出して、勤めをやめてからの交際は、次第に深いものになっていく。

彼にとってこの交際は、彼の人生に潤いをあたえた。童話作家を目指した一途な思いの中での一輪の花模様であったものと思われる。

1933年（昭和8年）南吉20歳。次第に彼女への思

いが強くなってくる。このことについては、次の章で述べることにする。

#### 4 青春の苦悩

##### (1) 咸子との恋

東京外国語学校に入学して以来、1年間は殆んど咸子に関する記述はない。1933年1月1日から彼女の名が出てきて、3月31日までに12回書かれている。

1月1日、住吉神社の森で彼女に手紙を渡そうとして、呼び出したが来なかったらしい。1月11日には手紙を受け取っている。3月27日、深夜目覚め、明け方まで眠れず。彼女のことを思う。

4月に入ると彼女への想いが一層強くなる。

4月2日、読書欲起こらず。彼女のことばかり思う。

4月3日、彼女を思う性欲が読書を妨げる。

4月4日、冒瀆的な妄想に襲われ、勉強ができない。

4月5日、彼女、来宅。夜10時頃までいて帰宅。

4月6日、思いは彼女のことばかり。

4月9日に、医学専門学校に在学している中山ちえに東京までの付き添いを頼まれて、上京することになる。

4月8日、彼女のことを思う。東京に恋人おらず。明日の上京気が進まない。

5月1日、彼女からの手紙、母の提示する条件に二人は適さない旨、書いてくる。

5月7日、強い体力が欲しい。女性に性的満足を与えないと、女性は男を捨ててしまうのではないかと不安になる。下宿へ帰るのが寂しい。

5月27日、彼女からの手紙。写真同封。他からの縁談を断り、南吉のことを母に話したという内容が書かれていた。

こうして一途に咸子は南吉への思いを強くしていく。一方では彼女を手放したくないという思い、他方では、果たして自分の体力・財力で、彼女を幸せにすることができるかという不安があったと思われる。

喫茶店ポニーの女性の強烈な印象に、目を奪われて、彼女への思いを薄めようとしたり、青い簡単服

を着た彼女に幻滅し、彼女のどこがよかったのかと醒めた目で見ようとしたり、彼女から目を逸らそうと努力している様子が伺える。

##### (2) 咯血・帰郷

翌年1934年2月25日、友人と喫茶店で12時近くまで文学論を戦わせて、下宿に帰る。便所で咯血する。(喫茶店で咯血の説もある) この頃、顔色が優れず、3日に一度は盗汗する。

学年試験を止めて、帰郷。下宿の人にだけ別れを告げ、トランクと洋傘を携えて、東京を発つ。

3月15日～16日にわたって書いたと思われる「父」という作品がある。(未完であるが) 生家がうどんや屋、異母妹、両親の仕打ちなど明らかにフィクションである。が異母妹を配し、異母兄を慕い、二人が結ばれない状況を設定し、それでもなを、両親の奨める縁談を断り続ける妹お道と家族の描写はまさに真に迫っている。

「縁もののだで、いい縁があったとき嫁しとかんと、もういくら待ってもろくな縁談はこないもんだでな。お父つあんと、お母つかさんとよく話してみたが、あそこならええと思うだけどな。」それでも、お道は依然身動きもしないので、加次郎ははらがたってきた。

「やあ、どうするでや。黙とっちゃあわからんじゃねえか。いやならいや、ええならええとはつきりいえや、嫌なとこへ無理していく必要ないでな。」

と促した。それでも黙っているからには、お道は不承知と思わねばならない。そして、お道がその縁談を不承知だということは、お道と訓二が恋を犯していることの証左であるのだ。彼はこのことを最も恐っていたのに、ついにそれを見せつけられてしまった。

「お父つあんが、こげん一生懸命になってやっておるのに、こでなものあ屁ともおもってやがらん。太いあまだ！」

と、かんだかい声で叫ぶと共に、臂を伸ばしてお道の横っ面を張り飛ばした。

訓二は芸術家を志して東京に出るが、病のために帰郷する。ここまでは南吉の置かれた境遇と一致する。ここで異母妹がいないのに、何故登場させたのか。作品が書かれたのが、1934年3月ごろ、直前の2月には咯血して期末試験をやめて帰郷している。

咸子を諦めようとするが、それもままならない状況の中で、相克し葛藤している時である。

作品「父」での妹道子の兄を慕うほのかな恋、許される筈のない異母妹との禁断の恋は、南吉との結婚を反対している咸子の母、そして健康に自信を失った南吉自身がこの作品の背景にあるのではないか。

両親の説得にも拘らず、諦めようとしないう道子をここに配したのは、咸子もそうあって欲しいという願望があつてのことではないだろうか。彼にとっては、この作品を完成させることはさほど難題とも思われないのに未完成であつた。その理由は、この時点では、彼女との関係が抜き差しならぬ状況にあり、咸子との結末をどうつけたらいいのか、悩みに悩んでいたのも、ここから後が書けなかったからではないかと想像する。

7月26日に彼の日記には、

この頃、彼女に対して、自分は肉体虚弱・精神冷却・文学と孤独を好む性格であると話し、結婚を諦めるよう説得するが聞き入れられず。

「…私の恋人はなかなか諦めてくれません。私は世間一般の男と違う。肉体が虚弱である。精神が冷却している。僕は結婚しても妻をあまり顧みない。文学と孤独を愛するからだ。世間一般の夫は妻といて始めて気持ちが充実する。僕は独りでいて充実している。だから、僕と結婚したらあなたは不幸だ。僕なんかよして、よい縁談があるうちに他所へ行ってしまうなさい。」

と、僕は諄々と諭す。だのに、彼女は、

「あなたがもし、ある女と結婚して、その女を不幸にするなら、咸子とその不幸な女の子になりたい。」

などと、やほなことをいう。なんでもかんでも、僕のところさえ来ればいいと思っているのです。

と書き記している。

彼女へのこの説得は恐らく本心ではないだろう。「咸子とその不幸な女になりたい」と彼女はいった。この言葉を聞いて、嬉しかっただろう。諦めるように説得しているが、本心では「それでも一緒にいたい」と言ってくれるのを望んでいただろう。彼女にこれだけ冷たく言い放ったのに、それでも私を思っていてくれると思うと、何処かほっとしたような安心感があつたのではないか。

ところが、1934年12月～1935年1月と思われるが、

「咸子が結婚する噂を聞き苦悩する」と日記に書き、1937年3月6日の日記で、「半田商業では英語の教員の採用はないといわれ、かえって安心する。帰途、遠藤氏宅を訪問。夜、眠れない。咸子との自殺のことを考える。」と記している。

これらの事実から、結婚するためには幾つかの障害があり、無理なことは分っているが、なお、彼の心の中には別れ難い想いがあつたものと思われる。

このように考えていくと、「父」に登場させた道子はまさに、咸子と自分自身がベースになっていると想像することはあながち間違いとはいえないだろう。

さて、視点を変えて、作品の中での家族の人間関係を目を向け、その描写から南吉の思いを推測してみる。

家族は父（加次郎）、義母（お蔭）、義妹（お道）主人公（訓二）の4人である。父はうどん屋を営んでいる。訓二が咯血で帰郷して一緒に住んでいることが世間に知られたら客は遠のくだろう。その心配もあつて、訓二を離れの小屋に住まわせる。

加次郎はお道が訓二に対して持つ同情を否定してしまう気にはなれなかった。訓二がそこへ移る日3人で、布団や書籍、火鉢、灯台などを運んでやった。そして、訓二をそこに入れて3人が帰ってくる時、お道が急に泣き出したのを、加次郎は「何を泣くだ」と頭から怒鳴りつけたが、それは、お道の同情を叱ったのではなく、泣くということを叱ったのであつた。めそめそ泣くなんてことは非常にうるさいことだ。しかし、妹が兄に対して同情を持つということは加次郎にとっては嬉しいことであれ、決して不愉快ではなかった。その精神は肯定した。しかし、こっそり石油を盗み出す行為はそのまま受け入れることは出来ない。

父加次郎は訓二が帰ってきたことについて、困ったことになったという思をもっている。しかし、父親としての幾許かの愛情のかけらはもっている。訓二に対するお道の思いは次第に強くなっていく。

このことを察した義母お蔭は、警戒して膳を運ばせていたお道に代わって、自分で運ぶようになる。

そこに描かれた「父」は人間としての暖かさ、親としての愛情が感じ取れる。それに対して「母」は何の役にも立たない、家を食いつぶしてしまうような子はどうにかしろと、父に迫っている。自分の子ならもういつか始末をつけるのに、とも言っている。まさに、冷酷非情な義母の心を描いている。



1935年2月25日の咯血は、かなりのショックであったことともわれる。ここにあげた作品「父」の現実を厳しく見つめ、父親、義母の内面を鋭くえぐった冷徹な描写などはこれまでになかった人間の心の奥深くに迫っている。運命に翻弄されて苦しむ南吉の姿がここに描かれている。

## 5 生きる苦悩

### (1) 咯血と作品「帰郷」

再び咯血し、1936年11月16日、南吉は、貿易雑貨商「商工会館」を退職し、郷里に帰る。帰郷後、安城高等女学校に奉職するまでの2年間は、彼にとって、精神的にも、経済的のも肉体的にも最も苦しい時代であった。

彼の日記からその苦しみ的一端を覗き見てみる。

1937年

- 1月21日 父から就職活動をしないうことを注意される。
- 1月22日 自分ははみ出し人間だと思う。
- 2月6日 碁盤を持って、遠藤氏宅を訪問、就職の見通しが立たないと聞き、憂鬱。寝る前自殺を考える。いつの間にか外国語学校の生徒になって信州へ行き、気がつくと飛行機のパラシュートで飛び降りる鮮明な夢を見る。
- 2月8日 くしゃみ止まらず。母から火鉢の中に痰を吐くのをとがめられる。
- 2月9日 母に頼まれた餅搗きをやめ、囲碁をする。身勝手さを責められる。良心のうずき覚える。
- 2月15日 両親が倒れるまで寄生虫のような存在を続ける決心をする。
- 3月2日 夕食の際、父に就職活動をするようにいわれ、まだ体調がよくないことを伝える。父を落胆させてしまう。夕食後、父母が、今後、儉約をする話しを聞き、死にたい気持ちになる。
- 3月4日 手紙を投函して帰ると、父は菓子箱を点検中、就職運動で、父が苦勞することについて、地獄の思い。遠藤氏、戸田氏の訪問予定を立てる。  
夜、咸子との服毒心中を空想する。
- 3月7日 金が欲しい。思うのは自殺のこと。

彼はもともと日本の自然主義の文学について、「私生活の暴露であって、物語性が喪失している。」と、強く批判している。したがって、小説「帰郷」はフィクションの部分が当然あるが、ここで描写されている父親と義理の母親と自分との関係は、彼の帰郷したときの苦しさが、かなりリアルに表現されていることが日記と照合すると分る。

「帰郷」を参考にして、日記を読むと、彼の心を一層深く読み取れると思われるので、長文だが、後半部分を掲載することにする。

### 作品「帰郷」抜粋

「いくらだよ。」やがて父は物静かな低い声できいた。「25円」息子は涙をすすりながら、答えた。「払っちゃあなかただなあ。」「……」

「帰る前に送ってやった金どうしただよ。」「看護婦と下宿屋と洋服屋に払ったらのうなった。」

…

「きさんのような奴は、親も何もかも食ってしまうだ。」と、父は立ち上がりながら投げ出すように言った。「みんな食ってしまうだ。親も家も。」

…

母親は何かのきっかけで、ぶつぶつひとり言を言い始めることがあった。そういう時、彼女の言葉は悪魔の口から出るそのような毒を含んでいた。みんなはその毒のために、益々憂鬱になり、怒りっぽくなっていった。みんなは敵を見るような目で、お互いに相手を盗み見るのであった。

それから4日後、取り入れの最後の日、田から帰った両親は、息子の姿がいつものように店に見えないことを発見した。父親が離れに行ってみると、雨戸を閉め切った闇の中に息子は毒を飲んで死んでいた。……息子の机の上にあった遺書には次のようなことが書いてあった。

「父上母上、この不幸者が、生涯不幸をし続けてきて、今日最後の不幸をすることを許してください。父上母上、憶えば私たち3人は不仕合せであった。あなた方は、私のような子を持っていたがために、私はあなた方のような親を持っていたがために。」

私の不幸の始まりは、私の生母の弱かったことである。彼女が弱かったため、弱い私が生まれ、彼女は私を育てずに死んでしまった。

それから母上、あなたが来てくださった。あなたは私を愛しては下さらなかった。しかし、私はけっしてあなたを怨まない。何故なら、あなたは

他人なのだから。それに、私は愛されるような子ではなかったに違いない。母上あなたは父の家に、幸福と不幸を持ってこられた。あなたは右手に白い花、左手に黒い花を持ってこられた。あなたは機嫌のよいとき、父を和らげ、私にも愛嬌を振りまいてくれた。そういうときの私の家は天国のように平和であった。

しかし、あなたが一度不機嫌になると、あなたは天使から、悪魔に変じてしまう。あなたの口から毒が進み、私たち周囲を地獄にしてしまった。この地獄から一番の影響をこうむったのは私だった。私は体が弱くて、神経質で感受性の強い子供だった。私は人を愛せなくなり、希望をもたなくなり、氣力をすり減らしてしまった。

父上、あなたは私を専門学校にやったことを悔いておられた。まさしくあなたは悔いるべきである。このような肉体と、このような精神に教育を施したとて何になるものぞ。

父上、母上、私たちの不幸をここまで導いてきたのは、あなた方の無知であった。あなた方が無知であるために、私の精神の芽をつみ、私の肉体を腐らせた。また、あなた方が無知であったが故に、私は、あなたがたが田から帰ってきて、私に浴びせるあのいやみ、愚痴、あれらが如何程、私の心を刺したか知るまい。あれらは私の弱っている心を踏み破った。そのために私は熱が出て、12時を越しても寝られなかった。私は今日熱を計ってみて、東京にいるときより様態が悪化していることを知った。このまま、あなた方の嫌味と愚痴を聞いていたら、遂には肺を犯されて死なねばならない。精神が不健全になっているためか、私はそう考えた。

ところが、今日また、あなたがたの嫌味や、愚痴の原因を造ってしまった。鶏を一匹猫にとられてしまったのである。猫に盗られた一羽の鶏がどんなにあなた方を落胆させるか、私はよく分る。よく分るが故に、私はあなた方の帰りを待つのが恐ろしい。そんなわけで、私はあなた方を待たないで、死ぬ決心をした。

父上母上、今はもうなにも言いますまい。さようなら。」

この作品が書かれたのは、11月16日に帰郷した直後、即ち12月13日のものと思われる。日記にその苦しさを訴えているのが、翌年1月から3月までである。帰郷後、1ヶ月もたたない病身の南吉に対

して、心を刺すようなねちっこい言葉で、両親は嫌味や、愚痴を並べたのだろうか。その雰囲気はあったとしても、作品に描かれたような冷徹さがあったかなかったかは明らかではないが、日記に書かれた父と母の言動は、感受性の強い、しかも追い詰められていたこともあって、かなり増幅して彼の胸に突き刺さったのではないか。

彼にとっては、両親がそれほど冷たかったかどうか問題ではなく、一層の冷徹さを描くことによって、人間の深層を表現しようとしたと受止めたい。

1939年4月30日の日記に、

木村トシが「歌だとかいろんな趣味も、死んでからのことがわからなきゃあ、面白くないという人もありますね。」という。この間に対して、「死の問題が解決されなければ安心して生きられないですね。」と、僕が言う。……

と書いている。この日記は、作品「帰郷」が出来てから3年後である。執筆中、彼はそう考えていたのかは定かでないが、少なくとも、病弱という自分の運命と対峙しなければならなかった彼にとっては、「死」は重要なテーマであったと断言できる。

作品「父」では、お道に対して、「…ず太いあまだ！」と癪高い声で叫ぶとともに、臂を伸ばしてお道の横っ面を張り飛ばしたで、終わっている。それに対して、「帰郷」は息子を自殺にまで追い込んでいる。

この作品「帰郷」は、3つの宿業をからませて描いている。

その一つは、宿命である。生母が弱かったために、弱い私が生まれ、生母は私を育てえずして死んだ。このことは、彼自身ではいかんともし難い運命的なことである。こうした宿命とどう、向き合うかということ。

二つ目は、人間のうごめく心と我執である。右手に白い花、左手には黒い花を持ち、いつでもこの世を地獄に突き落とす恐ろしき鬼神も人間は持っていること。

三つ目には、無知は罪惡でもある。「あなた方が、無知であるために、私の精神の芽を摘み、私の肉体を腐らせた」、あまりにも無知で、無神経がナイーブな心をずたずたに刺し腐らせること。である。

重要なテーマである「生と死」を縦軸にとっている。彼は死の問題が解決されなければ安心して生き

られないのである。この作品の中で、息子の自殺まで描いたということは、死まで描かなければ、作品は完結しないという彼の人生観から必然的なことだといえる。また、「生」の問題は、人間の宿業（宿命・我執・無知の罪惡）を横軸にとり、彼の生き様をベースにして、自らの哲学を語っている。

ここで、敢えて「南吉の哲学」という言葉を使ったには、彼の日記に、「哲学という学問は、人間と離れたところから人間を観察する。文学は人間そのものの中で人間を見つめていく。その点で文学のほうかはるかに哲学的である。」と述べていることからである。

作品「帰郷」は、作品としての文学的価値と同時に、彼自身を知る重要な参考資料でもある。苦境にたった南吉の苦闘は、まさに生きる苦悩そのものであったといえる。

## (2) 前編から後編へ

昭和11年、南吉23歳、東京外国語学校を卒業し商社に就職する。就職と下宿生活は体力を消耗したのであろう。咳が止まらず、10月に第二回咯血をする。11月16日に帰郷、「就職さえすれば」と楽しみにして、苦しい家計の中から学費を工面してきた両親の落胆は大きかったであろう。その上、病氣療養のための帰郷である。両親との間に軋轢があったとしても、それはしかたないことであろう。

しかし、これらの悲しみをモチーフにして、11月21日「螢色の灯」、11月23日「帰郷」、同じ年に「小さいバラの花」を書き上げている。

これより1年前、彼は「でんでんむしのかなしみ」という幼年童話をかいている。（この作品は皇后様が1998年、インドで開催された第26回IBBY世界大会での基調講演の中に挿入された作品の一つである。）

1年後、貧しさ、病苦、両親との軋轢という三重苦を背負って生きることになる彼の人生を暗示するかのような、そんな作品である。

後編では、三重苦のどん底の生活の中で、何に救いを求め、どうやって苦しみを乗り越えようとしたのか。また、その中で彼自身の人生観をどう変えて行ったのか。それらのことを以後の作品、日記で探ってみたい。

## 【参考文献】

新美南吉全集 発行所 牧書店

発行者 佐々間裕三

第一巻 月報ふるさとの心「南吉の宗教性」

第二巻 「赤蜻蛉」「銭坊」「中秋の秋」  
「張紅林」「巨男の話」

第三巻 「ごんぎつね」「のら犬」「屁」

第四巻 「でんでんむしのかなしみ」

第五巻 「かわA」

第六巻 「螢色の灯」「父」「帰郷」  
「小さなバラの花」

第十巻 昭和4年自由日記1929年16歳

月報「童話における物語性の喪失」

根本正義

「手紙のこと・日記のこと」

清水たみ子

第十一巻 メモとノート日記

昭和12年ノート・日記1・2

昭和13年・14年ノート・日記

第十二巻 昭和14年ノート・日記3

昭和15年ノート・日記1・手帳15年

昭和16年・17年ノート・日記

新美南吉全集 別巻1

南吉年譜 3P～432P

全集出版を祝して

「新美南吉と私」 巽聖歌

「自己放棄者の到達点」—新美南吉童話論—

発行所 牧書店 著者 佐藤道雅

毎日新聞 1998年9月28日

「皇后さま、読書の思い出を語る」